

ひと味違う明日香の魅力で観光客を惹きつける ～奈良県高市郡明日香村奥明日香地区～

奈良県高市郡明日香村は、奈良県中部に位置する村で、律令国家が初めて形成された時代、わが国の中心地として栄えたところ。大阪や奈良市から比較的近い位置にあるにもかかわらず、古都保存法、明日香法（明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備に関する特別措置法）による規制によって開発が制限されるなど、日本の中山間の原風景が未だ多く残されている場所である。

地域には蘇我馬子の墓とされる石舞台古墳や高松塚・キトラ両古墳、飛鳥寺、亀石、猿石など歴史的遺産、著名な観光名所が点在し、奈良県でも有数の観光地として知られている。さらに、世界遺産暫定リストにも登録されている。

今回の観光まちづくりレポートでは、この明日香村南部に位置する「奥明日香地区」における地域振興の実状を紹介する。

奥明日香地区の概況

明日香は、多くの観光客が訪れる奈良県でも有数の観光地として全国的に有名だが、南へ少し足を伸ばした場所にある「奥明日香地区」は、ひと味違う明日香の魅力で訪問者を出迎えてくれる。

奥明日香地区は、明日香村の南部に位置し、稲淵^{いなぶち}、栢森^{かやのもり}、入谷^{にゅうだに}の3つの大字からなる農村集落である。稲淵地区は、世帯数60、人口は188人（平成20年8月現在）で、明日香村史によると、「稲淵」の名は、日本書紀に「南淵河上に幸し雨を祈る」と書かれている。また漢人系の氏族の知識人である南淵請安^{みなぶちのしょうあん}がここに住んでおり、ミナブチが訛ったともいわれるが、諸説あって定かでない。「栢森」は、飛鳥川の上流で谷底平野が少し開けている地形に立地し、桜井吉野線の道路沿いに塊状の集落を形成しており、世帯数は28、人口は87人（同）である。「入谷」は飛鳥川の上流

地域の山腹斜面に立地し、世帯数19、人口35人（同）の集落である。

奥明日香の一年は、神様に子孫繁栄を願い、飛鳥川に綱をかける「綱掛神事」に始まり、春はれんげが咲き誇り、夏は蛍が飛び交う。そして秋には稲穂が黄金色に輝く棚田と彼岸花の風景の絶妙のコントラスト、そして彩りを添える「かかし」など年間を通じて変化に富んでいる。



棚田と彼岸花



栢森集落と奥明日香地区の位置



稲淵棚田ルネッサンス実行委員会

【棚田オーナー制度】

「奥明日香地域」は、これまで訪れる人も少なく、地元では専業農家の減少や高齢化が進み、過疎化が進行していた。主産業である農業にもかかわらず見え始め、生産効率が悪い棚田では耕作放棄地が増えて、景観的にも深刻な状況になっていた。

こうした状況に危機感を抱いた稲淵地区の住民は、地域活性化を図るべく平成7年に「稲淵棚田ルネッサンス実行委員会」を発足させた。

同委員会では、翌年「棚田オーナー制度」を立ち上げ、この制度を通じて都市住民との交流を図るとともに、日本の棚田百選に選ばれた稲淵の棚

田風景の景観保全を積極的に推進しようと考えた。田んぼを借りる素人（オーナー）とオーナーを支え指導する地元農家のインストラクターで構成される、棚田オーナー制度は、棚田を所有するのではなく、区画ごとに一年単位で貸し出しをするものである。

初年度は大阪府など都市圏の住民を中心に46区画の契約が成立し、土日を中心に田植え、稲刈り等を行う人が家族連れで来訪するなど、徐々に訪問客が増加し、地元との交流も活発になってきた。

オーナーの数は、開始した平成8年以降着実に増加し、現在、区画は満杯の状態になっている。ただ、申込みが多くても、現状では新たに区画を設けることは難しいのだという。

また、発足当時60～70代であったインストラクターは、10数年経った今、高齢化してきているが、次の世代がいない。今後、オーナー制度の存続のためにも若い世代のインストラクターが必要である。

発足当初からオーナーになっている数人は、長年の経験から農業技術のレベルがかなり向上しているため、今後は指導者的な役目を担っていくことも必要であろう。



稲淵棚田での田植えと稲刈りの風景

【かかしコンテスト】

「稲淵の棚田の景観を後世に残し伝えていくためには、明日香で育った人と明日香を愛する人が主体となって取り組むことが何よりも大切である」との観点から、棚田オーナー制度発足と同じ平成8年より「かかしコンテスト」を実施している。

かかしコンテストは田んぼの風景の象徴である「かかし」を広く一般から募集して、「かかしロー

ド」（棚田の間を走る農道）に展示、表彰し、明日香の棚田の景観保存に寄与することを目的にしている。毎年60～70点の応募があり、今年は68点の作品が「かかしロード」に立てられた。9月21日にかかしコンテストが行われ、最優秀賞などの入賞作品が決定した。なお、かかしは、コンテストが終わった後も、11月16日の収穫祭まで棚田を見守っている。



ルネサンス実行委員会作成のジャンボかかし（左）と平成20年の最優秀賞「はなさかじいさん」

棚田オーナー制度とかかしコンテストの実施は以下の3つの点で村の活性化に大きく寄与している。

- ① 田んぼの荒れを防いでいる（かかしが立つ両サイドの棚田の7～8割が利用されている）
- ② 以前は、石舞台から奥（南）へは観光客が入ってこなかったが、近年、来訪者が増加している。平成20年のかかしコンテストの日は約1万人の来訪者があった。
- ③ 野菜の販売所の設置や棚田オーナーを自宅に泊めるなど、地元人と都会人とのふれあいが頻繁に行われている。

棚田オーナー制度を運営する財団法人明日香村地域振興公社（愛称：あすか夢耕社）の小倉係長は、「道路沿いに野菜の販売所ができたり、家に人を泊めたりして、都会の人々とふれあうことなど、今までは全く考えられなかった」と語っている。

神奈備の郷活性化委員会

奥明日香地区を別名「神奈備の郷」と呼ぶ。

神奈備地域にはもともとダム建設の計画があった。しかしながら、明日香地区の歴史的景観が荒廃することや財政難そして他府県での脱ダム宣言等の例から計画は中止された。

これを機に明日香村では平成14年8月に、奥

明日香の3地区で「神奈備の郷活性化委員会」が結成された。この委員会は、一地域だけの利害を考えるのではなく、過疎化・高齢化・荒廃農地の進行という共通の課題を抱えている3つの地域が協同・協力し、奈良県が実施する飛鳥川の河川整備事業である「神奈備の郷・川づくり計画」(*)と連携して施設整備やソフト事業等、奥明日香の活性化を実現するための活動を主目的としている。なお、同委員会は以下の4つの専門部会で構成されている。

- ① 特産品等研究・開発部会…加工品・特産品等の研究・開発
- ② 食材等供給部会…食材供給のための苗木(動物を含む)等の選定・植栽等
- ③ 体験学習部会…農業等の体験学習メニューなどの検討・調整
- ④ 施設整備検討部会…活性化を図るための基盤整備に必要な施設の検討

(※) 明日香村の山間を源とし、明日香村の中央部を南北に貫流した後、橿原市を北流して大和川に合流する飛鳥川に関して、奈良県では下流より順次河川改修を行っているが、特に明日香村のエリアでは川自体が棚田、石橋といった周辺的环境と調和するなど、歴史的風土や自然環境を構成する要素となっているため、飛鳥川の自然環境、景観等を保全する整備を計画・実施している。

【郷土料理を提供する「奥明日香 ささら」】

神奈備の郷活性化委員会の中の「特産品等研究・開発部会」を「さらら」と名付け、スタートしたのが平成15年。さららの名は、奥明日香地区が、1300年以上の昔、天武天皇の皇后である鸕野讃良皇女(うののさららのひめみこ:後の持統天皇)が吉野へ足しげく通った道沿いにあることに由来している。

地元の良いものを使って何か地域の活性化ができないかと考えた女性部員数名が、それぞれ自信のある地元の食材を使った料理を1品ずつ持ち寄った。その中には「自分が知らないような珍しい料理」も多くあり、改良を加えることで商品化できるのではということになり、郷土料理「さらら膳」を作り出した。「さらら膳」は、地元こだわっており、食材の9割は地元でとれた野菜、山菜を

使っている。

料理が完成し、次はそれを提供する場所の問題である。田んぼにテントを張ったり、元企業の保養所やお宮の社務所も利用したりしたが、条件的に満足できる場所はなかなか見つからなかった。

そんな折り、栢森に適当な空き家があるとの情報が入った。所有者に交渉すると、「貸すのはダメだが、売るのであればOK。特に地元の人なら歓迎する」との話になり、「このままやめるか、家を購入して続けるかのどちらかしかない」(さらら代表の坂本博子さん)と二者択一の選択に迫られた。

平成14年の活性化委員会発足の時点では、村が飲食施設を建てる予定であったが、事業化に至らなかったため、最終的に土地・建物の購入資金と内装の改修費はさららのメンバーでやりくりし、ふるさとの食「奥明日香 ささら」は平成20年4月オープンにこぎつけた。



「奥明日香 ささら」の外観と「さらら膳」

ふるさとの食「奥明日香 ささら」

TEL: 0744-54-5005

URL: <http://okuasukasarara.kir.jp/>

営業時間: 11:00~16:00

営業日: 木・金・土・日(原則)

その他: ささら膳は完全予約制

「奥明日香 ささら」のオープンに当たり、行政等の補助金を全く受けなかったことは特筆すべき事であろう。

「奥明日香 ささら」ではこれからも家庭の味、地元の味を提供していくとともに、新たに2階部分を村内作家の作品展示スペースにする構想もあり、今後、奥明日香の情報発信基地としての役割も担っている。

その他

【綱掛神事】

綱掛神事は、栢森と稲淵に伝わる神事で、毎年1月11日に行われ、カンジョ掛神事ともいわれる。

子孫繁栄と五穀豊穡を祈るとともに、悪疫などこの道と川を通過して侵入するものを押し止め、住民を守護するための神事といわれている。

栢森の神事の特徴は、全体を仏式で行うことである。福石と呼ばれる石の上に祭壇を設け、僧侶の法要の後、飛鳥川の上に陰物をかたどった「女綱」を掛け渡す。一方、稲淵の神事は神式で行うことが特徴で、「男綱」を飛鳥川に掛け渡しをする。



稲淵の男綱（左）と栢森の女綱

【奥明日香地区のマップ作成】

明日香の観光マップは数多く出版されているが、その中に奥明日香地区はほとんど掲載されていない。



そこで、神奈備の郷活性化委員会では、手作りのマップを発行することにした。編集を担当したのは「奥明日香さらら」代表坂本さんの子女（元さらら会員）井上千恵さん。

【耕作放棄地の活性化に取り組む】

耕作を放棄した土地は雑草が生い茂り、景観を損ねているうえにイノシシの住みどころとなっていたが、人手が確保できないため、草刈りもまま

ならない状態にあった。

そこで、県が所有する和牛と電気装置一式を借り受け、電気を流した柵で囲んだ土地に牛を放牧することによって、耕作放棄地（棚田）を活性化させる取り組みを平成18年度（栢森地区）と平成19年度（入谷地区）に実施した。牛の状態や飲み水、電柵の確認は地域住民が交代で毎日行った。

放牧後は、牛が雑草を食むことで、生い茂っていた雑草が取り除かれた。土地は棚田の形状がわかるほどに景観が回復し、景観保全に大きな効果がみられた。きれいになったこの土地は今後、貸し農園として有効に利用することが計画されている。

【大仁保神社の整備】

入谷にある大仁保神社は仁徳天皇を祭神とする。標高450mの高さに位置しており、ここからの展望がすばらしい。金剛山や生駒山系の山々が遠望でき、天気の良い時は大阪湾も見ることができる。大仁保神社の社務所を改修する計画もあり、明日香村では新たな観光客を呼び込むトレッキングコースとして期待している。



大仁保神社と神社から見た展望

おわりに

奥明日香が耕作放棄による荒廃や過疎化といった地域が抱える問題に対応できたのは、地元の素材をうまく活用したことと都会人とのふれあい、交流が活発に行なわれたことが大きな要因としてあげられる。

日本の原風景を今なお残す奥明日香には、まだまだ魅力が多い。新たな交流、ふれあい等の企画も検討されており、今後も他とはひと味違った魅力で、人々の心を惹きつけていくことであろう。

（丸尾、井阪）